講演会レポート⑥

桜木由美子

二〇一五年度第ゑ億回目を迎えた池袋学。今回の講座には、本学大学院21世紀社会デザイン研究科の萩原なつ子教授が登壇し、「女性の視点」と「新しい公共」をキーワードとして「女性が暮らしやすいまちづくり―消滅可能性都市から持続発展都市へ―」について講演されました。

萩原教授は、講演の冒頭、「女性の視点」に絡めて、男女共同参画社会基本法が一九九九年に施行されたものの、いまだ固定的な従来型の性別役割分担が根強く、これが解消されていないこと、男性の意識改革が進んでいないこと、政策決定過程への女性の参画が進んでいないことを省み、現在は、「男はこうあるべき、女はこうあるべき」という考え方を積極的に変える必要性や「２０２０３０」、つまり「二〇二〇年までに各分野の指導的地位に女性の占める割合を、少なくとも三十％にする」という具体的な数値目標含む積極的是正策を紹介されました。グラフが示す社会の各分野における女性の割合は、どの分野でも非常に低く、物事を決定する場に女性がいない現状と、何かを決める場面では「そこにいる人の視点」に陥りがちであるという説明に、私自身も日常で感じる女性の生きにくさをあらためて考えました。加えて、是正策を有効に実現するためには、ワーク・ライフ・バランス、長時間労働の見直し、子育て支援策等と上手く連携を図りつつ、経過や達成具合のモニタリングを、継続的に実施する必要性を強く感じました。

続けてもうひとつのキーワードになる「新しい公共」とは「公助＝行政の取り組み」と「自助＝個人がすること」という両方を基盤に「共助＝市民の参加・参画」が加わった社会のことをいいます。この十年では共助の果たす機能が特に注目されており、特に地域の問題においては、これが顕著になっていることが説明されました。従来、地域を支えるのは行政でしたが、これからは市民による協働と男女共同参画に支えられた「新しい公共」こそ、「持続可能な社会づくり」の重要なファクターになりうるという考え方です。確かにその通りだと強く納得する反面、先にも確認された男女共同参画社会の状況には、まだまだ、その進展の加速化が言及される現状があることを考え合わせると、「新しい公共」における市民の協働と、男女共同参画の実際のギャップについて、疑問を感じる場面でもありました。しかしながら、次に紹介された萩原教授の具体的な取り組みに、この疑問がやはり、この考えを支持すべきだという確信に変わる気づきがありました。

昨年春、日本創成会議が二〇一〇年からの三十年間に、二十～三十歳代の女性の人口が五十％以上減少することを指標に、少子化と人口減少が危ぶまれる「消滅可能性都市」として全国八百九十六の自治体を発表、その中に、池袋が属す豊島区が東京二十三区内で唯一含まれ、各所で大きな衝撃が走ったことは記憶に新しいと思います。指摘を受けた豊島区は、危機意識から、区長を本部長に「消滅可能性都市緊急対策本部」を直ちに設置し、要因分析と、今後の対策についての検討を開始することに。呼びかけを受けた、萩原教授は、女性が暮らしやすい街は誰にとっても暮らしやすいと説き、「私たちがとしまを変える！！」のスローガンのもとで、二十～三十歳代の女性を中心とした「としまＦ１会議」

（以下、Ｆ１会議）の発足を区に提案、座長として地域で暮らす女性たちとともに、半年間政策形成に向けたチャレンジを、行うことになりました。Ｆ１会議は、行政に一方的に示された目標ではなく、行政と地域の住民が実際の対話を通じ、より多くの人が納得できる目標を設定し行政側に提案します。提案を受けた行政側に、単に「聞き置く」と処理されるのではなく、荻原教授自身の行政職としての経験を通じた知見に基づき、提案する時期を行政の事情に合わせて、巧妙に設定することで、最終的に、提案が次期の施策に反映され、事業化されることを目指しているそうです。Ｆ１会議の活動は創造的政策形成型の取り組みとして、行政に大きなインパクトとさまざまな変革を与えて、参画したメンバーにも大きな自信や活力をもたらしたと、いう結果は、まさに理想的な「新しい公共」の実践のモデルといえるでしょう。

「としまＦ１会議」のキックオフイベントで聞いた、豊島区のイメージの第二位は「池袋」でした。本講座で学ぶ「池袋」が、豊島区のチャレンジにより、さらに街の魅力と活力を増し、持続発展都市へと変容していくこれからに大いに期待したいです。

（さくらぎゆみこ　21世紀社会デザイン研究科博士課程前期課程一年次）